



(公財) 国際宗教研究所 宗教情報リサーチセンター

「ラク便利」 小特集

→他の論文・研究ノート・小特集のバックナンバーは[こちら](#)をご覧ください。

*印刷してご利用の際は2頁目以降を印刷して下さい。

小特集②

内戦終結後のコロンビアへの教皇フランシスコの訪問

ローマ教皇フランシスコは9月6～10日の日程でコロンビアを訪問した。同教皇の南米への訪問は2013年7月のブラジル、2015年7月のエクアドル、ボリビア、パラグアイに続く3回目。今回訪れたのは1国のみであるが、コロンビアの社会的背景を踏まえると教皇訪問のもたらしたインパクトは大きいと考えられるため、以下にその様子をまとめた。

1. 内戦が終結したコロンビアの社会的背景

コロンビアは50年以上続く内戦に苦しんでおり、2016年によろやく内戦終結が実現した。内戦の原因となった中南米最大の左翼ゲリラである「コロンビア革命軍 (FARC)」は1964年から活動を開始し、政府軍との長きにわたる内戦で25万人以上の犠牲者を出した (朝日 9/1)。2012年にサントス政権下で和平交渉が開始され、2016年9月に政府とFARCが和平の最終合意文書に署名したが、翌月に行われた和平合意についての国民投票では反対が僅差で賛成を上回り、和平合意は否決された。国民が和平に反対した理由は、FARC戦闘員の恩赦やFARCの政治参加を認めるなど、FARC側に譲歩した和平合意の内容に対し反感を抱いたためだとみられている (読売・夕 2016/10/3)。

このため和平計画は頓挫したかに思われたが、サントス大統領にノーベル平和賞が授与されるなど国際的な後押しもあり (朝日 2016/10/8)、修正和平合意文書が11月に議会で承認され、和平の成立が確定した (東京・夕 2016/12/1)。FARCは2017年6月27日に武装解除の完了を宣言し (読売・夕 6/28)、FARCの一部メンバーは政党「人民革命代替勢力」として合法的に政治に参加することとなった (朝日・夕 9/2)。

このようにFARCとの和平は実現したが、国民投票の結果から明らかなように、国民の間には和平に対するわだかまりが残っている。議会内では、FARCに対し強硬姿勢を取っていたウリベ前大統領の率いる合意反対派が、新和平案においてもFARCの政治参加が依然として認められている点などに反発している (東京・夕 2016/12/1)。サントス大統領の和平合意への動きは拙速だとする見方もあり、半世紀にわたる内戦で傷を負った国民の感情に配慮していない点や、合意内容がFARCに有利な点などが批判の対象となっている (毎日 2016/12/11)。

2. 教皇のコロンビア訪問の様子

このような社会的状況のコロンビアを、教皇フランシスコは9月に訪問した。同国は人口4,820万人のうち約94%がカトリック信者だとされている (カトリック 9/17)。訪問はコロンビア政府と同国司教協議会からの招聘に応じたもので、教皇庁大使のバレストレロ大司教は「教皇が1ヶ国だけを訪問し、4日も滞在するのは珍しいことです」と述べている (カトリック 3/19)。訪問に先立ち公開されたビデオメッセージで教皇は、「希望と平和の巡礼者としてコロンビアを訪れ、わたしたちの主における信仰を共に記念すると共に、平和と調和を希求するみなさんの愛と忍耐に学びたい」と述べた (キリスト 9/21)。

教皇が6日夜に空港に到着するとサントス大統領が出迎え、歓迎式が開かれた (キリスト 9/21)。翌7日午前には首都ボゴタの大統領官邸で大統領や各界要人と会談の後に、官邸前で国民へ向け演説した。演説においては「私が皆さんにお願いしたいのは、今日、社会の中で疎外され、脇に追いやられている全ての人に目を向けることです。あらゆる人が、社会を築き、形作っていく上で必要なのです。これはただ単に“純血”の人々だけでなく、全ての人によって達成されます」と述べ、真の豊かさは多様性にあるとし、社会的弱者に目を向けるよう求めた (カトリック 9/17)。演説に同席していたサントス大統領は、「コロンビアは紛争や戦争にのみ込まれる世界への模範になる」と歓迎の言葉を述べた (日経・夕 9/8)。同日夕方に市内のシモン・ボリバル公園で司式されたミサには当初の予想を大きく上回る約120万人

が参加した（毎日9/9）。ミサにおいて教皇は、コロンビアや他の国々にとって脅威となるのは不正義と社会的不平等、個人的利益の追求であり、そうした悪は人命の軽視や憎しみという闇を生み出すが、「イエスはこうした全ての闇を散らし、打ち壊します」と述べ、イエスの教えるように、利己主義を捨てて主に従うよう会衆に訴えた（カトリック9/17）。

8日には中部ビジャビセンシオで野外ミサが行われた。同地には内戦で家を追われた人や、社会復帰を目指す元武装組織の要員も多い。ミサの冒頭では内戦中に殺害されたモンサルベ司教とラミレス神父の「暴力と敵意の泥沼に対して立ち上がる」行為をたたえ、2人を殉教者として列福した。その後の説教では、内戦の被害者と加害者が和解への一歩を踏み出すよう訴えたことに加え、和解は自然環境に対しても必要だと語り、私欲で自然を破壊する行為を戒めた。教皇は同日午後には市内の公園で開かれた国民和解のための集会に出席した。集会には内戦の被害者と元武装組織要員の双方が参加したほか、武装組織の爆弾攻撃にあい多数の死者を出した教会から持ち出された十字架像が備え付けられた。教皇は同地で数千人の血が流されたと述べ、今後和解が進み、人々が苦しんでいる人を助けることができるよう像に祈った（カトリック9/17）。

9日には北部のメデジンへ移動し、児童養護施設を訪問するとともに、ミサを行った。説教において教皇は、キリスト教のおきてはないがしろにすべきではないが、真の信仰はただおきてを守るだけではなく、自分の生き方を変えて貧しい人や弱い立場の人の生活を改善するために働くことだと語った。最終日の10日午前中に北部カルタヘナに到着した教皇は、市内の貧しい地域を訪れ、建設途中の社会支援施設や、地域の教会系給食施設で長年ボランティアを行ってきた人物宅を訪問した。その後市内で司式した訪問最後のミサでは、それまでに述べられてきた平和と和解、社会的共生のテーマが再度強調された（カトリック9/17）。

3. 教皇が発した和解へのメッセージ

次に、コロンビア滞在中に教皇が発した国民と元武装勢力の「和解」に関するメッセージに焦点を絞り、さらに詳しく記述しよう。というのも、訪問のテーマとして掲げられた「最初の一步を踏み出そう」という言葉は、「階級による分裂や社会的不平等で二極化した国民の和解と、昨年の和平合意の実践」を求めるものと説明されているからである（カトリック9/17）。7日の大統領官邸前の演説では、教皇は政府が和平合意を実現させ内戦を終結させたことを賞賛し、合意をめぐって存在するわだかまりを解消し、和解への努力を進めるよう促している。その後のボリバル公園でのミサの際にも、集まった聴衆に向かって「あなた方には自分たちを傷つけた人たちを許す能力がある。憎しみを持たずに前を向くその姿勢を全てのコロンビア国民が必要としている」と呼びかけた（東京・夕9/8）。8日午前中のミサでは、参加者の多くが内戦により苦しみを味わったことに触れ、そのような被害者の言葉に耳を傾けるとともに、被害者は報復への衝動を克服することによって、平和を建設するプロセスを進めることができると語った（カトリック9/17）。午後の国民和解のための集会ではFARC元メンバーの男性や、肉親をゲリラに殺害された女性が自らの体験を語り、教皇は両者に暴力の連鎖を断ち切り、融和を受け入れるよう促した（読売9/10）。滞在最終日のミサでも、教皇は「最初の一步を踏み出そう」のテーマを繰り返し、聴衆に対し平和の達成に向けて個人の役割を果たすよう呼びかけている（カトリック9/17）。

このように、コロンビア訪問のほぼ全日程にわたって国民への和解への呼びかけが行われている。前回の南米訪問と比較しても、社会正義や環境保護の訴えおよび貧困地区への訪問といった活動は共通しているが、これほど国内の問題に触れたことは異例といえる〔→『ラク便り』68号小特集①参照〕。さらに、教皇の活動を伝えた一般紙の見出しが「コロンビアで融和訴え」「コロンビア和平を称賛」「ローマ法王、和平後押し」等となっていることも、今回の訪問の主眼が国民の和解にあると理解されていることを示している。

4. 教皇の「政治性」に関する指摘

こうした教皇のコロンビアでの活動を「政治的」と見る報道もある。『日本経済新聞』9月12日付の記事では、教皇は「5日間の滞在中、政府と左翼ゲリラの和平を繰り返し祝福。国民投票で和平合意が否決されるなど世論が割れるなか、サントス大統領の進める和平の既成事実化を後押しした」とされている。ローマ教皇庁とコロンビア政府は今回の訪問は「政治的ではない」と強調したものの、中南米では教皇を政治的に利用しようとする動きが存在し、コロンビア訪問はその一例であったという見方を同記事は示している（日経・タ9/12）。

実際に、前年のサントス大統領へのノーベル平和賞授与が和平を押し進めたのと同様、教皇の訪問に合わせて国内政治が動いているととれる出来事もある。国内第2の武装組織「民族解放軍（ELN）」はFARCとの停戦後も依然として活動を続けていたが、訪問直前の9月4日に停戦合意に至ったと発表された（赤旗9/6）。また元FARC最高司令官であった「人民革命代替勢力」のロンドニョ党首は、9月8日に発表した公開書簡で、教皇に対して半世紀にわたる内戦で国民を苦しめたことを「ざんげ」した（赤旗9/10）。こうした和平の進展に対しては、教皇の訪問が追い風となったと捉えるのが自然であろう。

この他にも教皇は、隣国ベネズエラのマドゥロ大統領が8月4日に憲法改正を目的とした制憲議会を発足させたことに対し、同議会が国の仕組みを権力側に都合良く変えてしまうと反対する意見に同意し、同日に制憲議会の招集を中止するよう呼びかける声明を発表している。さらに、国民の反政府デモを治安部隊が弾圧したことに対し、「過度で不均衡な力の使用だ」として政府を批判した（日経・タ8/5）。コロンビア訪問中にもベネズエラには言及しており、教皇は9月10日にカルタヘナの聖堂において、ベネズエラで苦しむ国民のために祈りを捧げている（カトリック9/17）。こうした出来事もまた、南米諸国の政治に影響を与えるものだといえる。

おわりに

本稿では、内戦の終結したコロンビアの訪問において、教皇が発したメッセージを詳述した。その内容はとりわけ、社会復帰を目指す元武装組織のメンバーと、内戦で苦しんだ国民の間の「和解」を促すものだったと理解できる。こうした教皇の活動を「政治的」と捉えるべきかはどうあれ、ノーベル平和賞の有力候補にも挙げられている（毎日10/2）教皇フランシスコの動向とくに政治性を含み持つような活動には、今後も注目していく必要がある。

〔文責：藤井修平〕